

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2025年11月14日

愛しきカン違い／100万回死んだネコと今戸の狐

先日、夕方の6時ごろ、高校昇降口わきの廊下を通りかかると、女子生徒が昇降口に荷物を置いたまま、ターツと階段を駆け上っていくのに出くわしました。ああ、帰ろうとして昇降口まで来たところで何か忘れ物に気づいて取りに行ったんだなあ、と思っていると、程なくして同じ生徒がターツと階段を駆け下りてきました。「どうしたの？忘れ物？」と声をかけると、彼女は「いえ…」と少し言いよどんだ後、「教室のロッカーにスマホを忘れて取りに行ったのですが、そもそも今日、私、スマホを持ってきていませんでした。…私もうダメだあ～」との答え。その場で二人で顔を見合わせて笑ったのですが、何ともいえずほのぼのとした温かい笑いでした。

人間、誰しも勘違いというのはあるものです。もちろん勘違いは、他人に迷惑をかけてしまう場合もあるし、あるよりはない方がいいかもしれません。が、一方で日常の中で生じる数々の小さな勘違いは、笑いのきっかけとなったり、時には人間関係をスムーズにしてくれることもあります。

これもまた先日、車を運転していて赤信号で停車しようとしたら、自分の前に信号待ちをしていた車のナンバーが、仕事関係でお世話になっている先生のものだと気づきました。その車の右側に並んで停車すると、先生は助手席に座り、先生のお嬢さんがハンドルを握っていました。自分が助手席側の窓を下ろすと、お嬢さんも気がついて窓を下ろしてくれたので「こんばんは」とあいさつをしました。しかし、時刻は夕方7時過ぎ、暗くて顔が見分けられないらしく、先生もお嬢さんも「誰？」というような怪訝な表情をしています。そこで自分は大きな声で、「こんばんは！梶です！」と呼びかけました。すると運転席のお嬢さんが目を丸くして「えっ！火事？どこ？！」。

その後、改めて「茨城高校の梶です」と名乗り、無事に誤解は解けて、三人で笑いながらそれぞれ車を発車させました。運転しながらお嬢さんの驚いた顔が目には浮かんで来て、しばらく思い出し笑いが止まりませんでした。

福井県立図書館が、図書館を利用する人たちの様々な「勘違い」をまとめた本を出しています。『100万回死んだネコ／覚え違いタイトル集』福井県立図書館（講談社文庫）がそれです。図書館には書名や著者名をうろ覚えのまま本を探しに来る利用者の方が少なくないといいます。司書さんはそのあいまいな記憶にもとづいて、利用者さんの探している本を推測しなければならないのですが、その中には思わず笑ってしまう秀逸な勘違いが多くあります。

例えば、この本のタイトル『100万回死んだネコ』は、ある絵本の題名を間違えて覚えていた例がそのまま書名になっているのですが、さて、元ネタが何だかわかりますか？…そう、『100万回生きたネコ』が正解です。100万回生きたら100万回死ぬわけだから、どちらでも同じじゃ

ね？と今考えたキミ、ちょっと素直さが足りていませんよ。

それではここで、この本に載っていた勘違いの例を次にいくつか挙げてみたいと思います。さて君は、いくつ、もとの正しい書名を答えられるでしょうか？

- ①『僕ちゃん』
- ②『先生が好きな等式』
- ③カフカの『ヘンタイ』
- ④『背中を蹴飛ばしたい』
- ⑤ねじ曲がったクロマニヨンみたいな名前の村上春樹の本
- ⑥『ストラディバリウスはこう言った』
- ⑦『海の男』

さあ、それでは答え合わせです。

- ①『僕ちゃん』 → 『坊っちゃん』夏目漱石

まあ「坊っちゃん」も「僕ちゃん」も、ええとこのボンボンって感じがする点では共通してますけどね、はい。

- ②『先生が好きな等式』 → 『博士の愛した公式』小川洋子

とにかく $A=B$ が好き！ということ？しかしまあ、公式ってとりあえず等式だから、あながち間違いとはいえないかもしれません。（数学は自信ないので、もしも見当違いなこと言ってたらすみません）。元ネタの『博士の愛した公式』は、交通事故で記憶が 80 分しかもたなくなった数学者と、家政婦の「私」、「私」の息子「ルート」の三人によって描かれる、切なく美しい物語です。

- ③カフカの『ヘンタイ』 → 『変身』カフカ

自分が一番爆笑したのがこれです。ヘンタイって、カフカさん、天国で聞いてたら怒るよ、絶対。『変身』はある朝目覚めたら毒虫に変身していた青年の話。十代のうちに一度は読んでほしい一冊です。

- ④『背中を蹴飛ばしたい』 → 『蹴りたい背中』綿矢りさ

ほぼ意味は同じだけど、『背中を蹴飛ばしたい』の方が、蹴りたい欲求がより強く、率直に伝わってくる（ような気がする）。『蹴りたい背中』は、綿矢りさが史上最年少で芥川賞を受賞した青春小説。オススメです。

- ⑤ねじ曲がったクロマニヨンみたいな名前の村上春樹の本 → 『ねじまき鳥クロニクル』村上春樹

これは、そう言われれば、あ、『ねじまき鳥クロニクル』ですね？ってなりそうですね。『ねじまき鳥クロニクル』は村上春樹の最高傑作と評価されることも多い小説です。余談ですが、来年こそ村上春樹にノーベル文学賞を取ってほしい！

⑥『ストラディバリウスはこう言った』 → 『ツアラトウストラはこう言った』ニーチェ

ストラディバリウスは、アントニオ・ストラディバリによって制作されたヴァイオリンの名称。すぐれた音質が特徴で、中には一挺^{ちよう}数十億円もの値段が付けられるものもあるそうです。『ツアラトウストラはこう言った』はニーチェの主著で、「超人思想^お」を説いています。ス、ト、ラ、ディ、バ、リ、ウ、ス。ツァ、ラ、トゥ、ス、ト、ラ……。ストラしか合うてへんやないかい！

⑦『海の男』 → 『老人と海』ヘミングウェイ

『海の男』という本ありますか？って聞かれて、はい、『老人と海』ですね？と対応した司書さんの守備範囲がすばらしいと思います。いやあ、プロですね。ちなみに自分の場合は、「海の男」で思い浮かべるとしたら、鳥羽一郎の『兄弟船』(注1)ですね。『老人と海』はキューバの海を舞台に、たった一人、巨大カジキと闘う老いた漁師の物語。読んだことのない人は是非。

この他にも『100万回……』には、『下町のロボット』『おい桐島、お前部活やめるのか？』『人は見た目が7割』『そのへんの石』『昔からあるハムスターみたいな本』など、シュールで意表をつく勘違いの数々が紹介されています。最初の三つは何となく分かりそうですが、後の二つが分かたら天才です。正解を知りたい人はぜひ『100万回……』を手にとって読んでみてください。

「勘違い」は、漫才やコントなどお笑いにもしばしば登場してきます。お互いに勘違いしているんだけど、なぜか会話が成立してストーリーが展開していく「すれ違いネタ」は、お笑いの定番ともいえるでしょう。すれ違いネタで、筆者が知る限り最高傑作だと思うのは、古今亭志ん朝さんの落語『今戸の狐^{いまどきつね}』です。

江戸は文化年間、三笑亭可楽^{さんしやうてい かるく}は名人の評判高い噺家^{はなし か}で、大変な人気を誇っていました。噺家を志す良輔^{りやうすけ}は、縁あってその可楽の弟子となるのですが、当時の落語界の習慣で、弟子に給金^{きん}というものは一切支払われませんでした。良輔の住む橋場は、今戸焼^{いまどやき}で有名な今戸の隣にありました。今戸焼というのは、素焼きの土器や縁起物の土人形を作る、江戸を代表する焼き物です。生活に困った良輔は、師匠の可楽には内緒で、今戸焼の狐に彩色するアルバイトを始めます。

当時、江戸では、花札を使った「狐」という賭け事が大流行していました。もちろん賭け事は天下の御法度、お上に知られれば厳しい罰が待っています。ある雨の夜、博打に負けて一文無しになった近所のやくざ者が、可楽の屋敷の軒先で雨宿りをしていました。すると、屋敷の中からチャリン、チャリンというお金の音、いくらいくらとお金を数える声が聞こえてきます。実はこれは、可楽の弟子たちが寄席^{よせ}で売ったクジの売り上げを数えている物音だったのですが、やくざ者は可楽の屋敷で賭け事^{はや}が行われているのだと早合点します。「素人だから丁半^{しろうと ちやうはん}(注2)ってことはねえな。さては、今流行りの“狐”だな。よし、夜が明けたら可楽のところへ行行って、いくらかせびってやろうじゃねえか」

翌朝、やくざ者は屋敷に押しかけ、主人の可楽に、賭け事のことを世間に黙っておいてほしいければお金を出せと脅します。「今、流行りの狐でござんしょ？ いや、やっちゃいけねえなんて野暮^{やぼ}は言わねえ。俺がツラを見せるたび、ちょいとこしらえて(お金を用立てて)こっちに渡してくれりゃいいんだ」賭け事など全く身に覚えのない可楽は、やくざ者の脅しなど相手にもしません。「私は噺家こそしておりますが、賭け事は嫌い。もちろん弟子たちにも厳しく戒めております。何かの

お間違いでしょう。どうぞお引き取りください」と席を立ててしまいます。

諦めきれず、しばらく座敷で悪態をついていたやくざ者を、ふすまの陰から覗く男がいました。それに気づいたやくざ者が「誰でえ、てめえは？」とたずねると、男は「あたくし、可楽の弟子で野^の楽と申します…。あの一、きつね、お探しですか？」と応じます。「おうよ、ここで狐ができてい^らる（狐の賭場ができて賭けが行われている）ことは百も承知なんだ！」と息巻くやくざ者に、野楽は、ここじゃ狐はできていない、ここじゃできていないが、橋場の良輔のところなら狐ができてい^とる、と耳打ちします。「師匠には絶対に内緒ですよ」と念を押す野楽に、やくざ者は上機嫌で「わかつてるよ。あとで^{ぜに} 銭が入ったら^{へえ} 寿司でも何でもおごるからな」と約束し、さっそく良輔の長屋に出かけていきます。狐の彩色の内職にいそんでいた良輔は、突然のやくざ者の訪問に大慌てです。

やくざ「お前が良輔か？お前のところで、狐ができてるそうだな？（狐の賭場が開かれているそうだな）」

良輔「いいえ！…そ、そんなものは、…私のとこじゃできていません！（今戸焼の狐など作っていません）」

やくざ「隠したってダメでえ。俺あ、師匠の弟子の野楽ってやろうに教わってきたんだ。お前がどうしてもできてねえって言うなら、…みなぶち壊しちまうからな！（賭場をめちゃくちゃにしてしまうからな）」

良輔「いやいやいや、それは困ります（今戸焼の狐を壊されては困ります）。実は…できてるんで…。あいすみません、つい、（生活が）苦しいもんですから…」

やくざ「そらあ、まあたいがい苦しいからそういうこと（賭場を開くこと）を始めるんだ」

といった調子で、二人のかみ合わない会話が続いていきます。やくざ者が「ところで、どうだい近頃は？（どうだい、最近の賭場の様子は？）」と尋ねると、良輔が「ええ、近頃はやっと顔がそろうようになりまして…（狐の顔がそろってきちんと描けるようになりました）」と応じ、やくざ者が「そうだよなあ一、それまでが苦労だよなあ（賭場に常連の客がつくようになるまでが苦労だよなあ）」と感心する場面など、何度聞いてもおかしくて笑ってしまいます。

さて、この勘違い同士の珍妙なやりとりは、どんなふうに着着するのでしょうか？志ん朝師匠の『今戸の狐』は音源のみが残されており、CDまたはYouTubeなどでも聞くことができます。

この世のすべての人で、勘違いをしたことがない人など一人もいません。今この文章を読んでくれている生徒諸君にも、そこそこ激しい勘違い経験の二度や三度はあるはずです。勘違いは、ある意味、とても人間らしいふるまいです。コンピューターやAIがどんなに人間に近づいても、人間と同じような「勘違い」をすることはきっとできないでしょう。

人と人が、互いの間違いを受け入れ合って、笑い合える。勘違いは、そんな社会の寛容性を計る尺度といえるかもしれません。（終）

注1）鳥羽一郎『兄弟船』

鳥羽一郎は演歌歌手で、『兄弟船』は1982年に発売された鳥羽一郎のデビューシングル。父親の形見の船で海に出て行く漁師の兄弟の思いが歌われている。『兄弟船』はロングヒットとな

り、鳥羽一郎は1985年の紅白歌合戦に初出場を果たした。

『兄弟船』に興味があった人は、下のURLをクリック！

<https://www.youtube.com/watch?v=7tPIgGv896M>

注2) 丁半

丁半博打のこと。サイコロ二つをツボに入れて振り、客は二つのサイコロの目の合計が偶数(丁)か奇数(半)か予想して金を掛ける。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。